

## アネックス・5 × 緑事業部

# 貢献人たち

いっしょけんぽん

CSRの現場から

コナラやクヌギ、ヤブ人。「私たちは同郷で愛ツバキ。都心ではめっき 媛島の出身。都会の地面り減った野山の草花を植はコンクリートやアスファルトで固められ、植物栽する「里山ユニット」。アルトで固められ、植物立方体のかごに保水性の が育つ豊かな土地がない

## 都市と里山つなぎ

### 在来種植え、都会に季節感を

高い人工の軽量土壌を入れて、土壌部分に加えて、かごの四つの側面にもツル性の植物を植えるため、同じ面積でも緑は5倍。この緑のキューブを用いて「都市に緑の空間を」と進んでいるのが「5×緑」(ゴバイミドリ)のプロジェクトだ。

「5×緑」の特徴は「その土地の在来種を植え、都会に季節感を取り戻すことだ」とユニットを開発した造園家の田瀬理夫さん(52)が呼び掛け

と痛感していた」と宮田さん(58)は説明する。ユニツトは茨城県の生産者に依頼している。サイズは小さく、小型の2号四方が1万8900円、30号四方だと2万9400円。個人宅をはじめ、集合住宅の屋上や団地の街路、企業の中庭など実績を増やし、採算の面でも「軌道に乗りつつある」という。

そして今年に入り、「東京里山計画」が動き出し

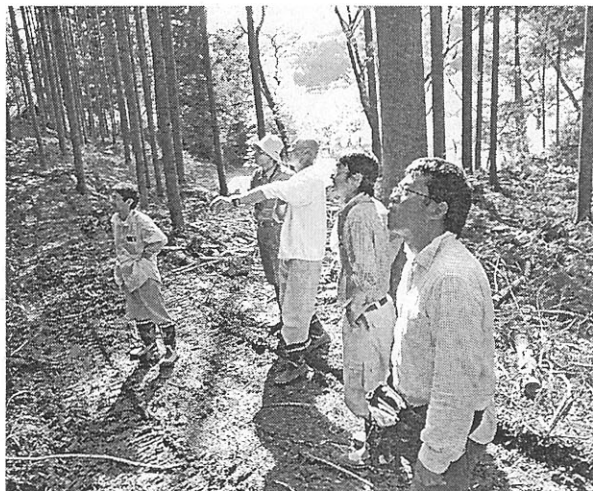
「里山ユニットはその土地の在来種の植物を使っている」と話す宮田生美さん



た。栃木県那珂川町の林業家や滋賀県高島市の棚田を守るボランティアらと「里山ネットワーク」を組み、その地域の里山の管理を委託。育てられた草花を「5×緑」が植栽用に購入する仕組みをつくった。いわば里山保全のCSR(企業の社会的責任)。今月初旬からは慶応大学総合政策学部の國領二郎教授らとの共同研究で、地域の植生調査なども本格的に始まった。

「私たちがやっていることはささやかなことだが、それを支える価値観が確実に広がっている」。宮田さんはそう実感する。

【明珍美紀】



植生調査を行う慶応大の学生ら—栃木県那珂川町の「馬頭の森」で、アネックス提供